



TITLE:

<図書紹介>伊藤博一, トンゲー・ロード-ビルマ賠償工事の五年間, 岩波書店, 岩波新書 497, 昭和 38 年, vii+203 ページ

AUTHOR(S):

本岡, 武

CITATION:

本岡, 武. <図書紹介>伊藤博一, トンゲー・ロード-ビルマ賠償工事の五年間, 岩波書店, 岩波新書 497, 昭和 38 年, vii+203 ページ. 東南アジア研究 1963, 1(2): 77-78

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54801>

RIGHT:

図 書 紹 介

海外技術協力事業団：東南アジアのデルター 東南アジアデルタ地域開発計画報告書．昭和38 年．151ページ．謄写版

東南アジアのデルタは、地理学の立場からだけでなく、総合的研究なり、あるいは進んで経済開発なりの立場から、きわめて興味ある問題である。東南アジアの3大デルタ、すなわち、メコン・メナム・イラワジのデルタについては、比較研究は、あらゆる意味で重要である。このデルタの比較研究はいままでのところ、わが国だけでなく、国際的に見ても、あまり行なわれていなかった。ところが、昭和37年から38年にかけて、デルタ地域開発の基礎調査として、海外技術協力団が農林省農地局調査官出口勝美氏を団長とし、農林省農業技術研究所永井皐太郎、建設省国土地理院大矢雅彦両技官を団員とする調査団を送った。その報告書がここに紹介するものである。

本調査団は、台湾の濁水溪、タイのチャオプラヤー（いわゆるメナム）、ビルマのイラワジ、インド・東パキスタンのガンジスの4デルタを踏査し、これに濃美平野を比較のために加え、デルタの自然的特徴（とくに地形と洪水型）、デルタの土地利用と水利用（灌漑と排水）、デルタの農業と農村、デルタにおける現行の開発事業と計画、さらに今後の開発にたいする所見とに分けて踏査結果を報告した。

僅か70日あまりでこの広大な4デルタをカバーしたのは、たいへんな努力だったと思う。とくにデルタの自然基礎と水利用については、専門家だけあって、よく観察されており、きわめて興味深い。もっとも、多分に印象記録的な程度にとどまらざるをえないところもある。もちろん、数日でたとえばイラワジデルタを観察してしまうことは、とてもできない。しかし、それにしても、わたくしの知るかぎりでは、デルタの比較研究として、はじめてまとまったものであり、その意味で評価されてしかるべきだと思う。また、本書は謄写印刷で関係者に配布されるにすぎないから、一部のものにしか知られないうらみがある。ここにとくに本報告書を取りあげたのは、こうした種類の文献がなるべく広く紹介される必要があると思うからであ

る。

わたくしは、デルタの自然的基礎の研究として本調査にきわめて有意義であると思う。というのは、これから本格的に手をつけられるべき研究の first step であるとの意味からである。しかし、その農業状態の報告や今後の開発にかんする所見は、あまりにも印象的すぎる。常識論の域を脱しないようである。なお、早急に報告書が出された関係もあるだろうが、縮尺ののっていない地図があったり、参考文献として同一書が重複して出ていたりして、かなりずさんである。

それにしても、東南アジアの文献として、最近官庁なり団体なりから刊行されている資料類にも十分注意をはらう必要がある。その1冊としても本書は注目されてよいと思われる。（本岡武）

伊藤博一：トンゲー・ロードービルマ賠償工 事の五年間．岩波書店、岩波新書 497．昭和38 年．vii+203ページ．

ビルマへ旅行して、ビルマへの賠償工事第1号としてのバルーチャン発電のことを聞かないものはないだろう。また、東南アジアへの旅行者で各地における日本工営株式会社の土木建設の話を耳にしないものはないだろう。わたくしは残念ながら、いまでのところ、日本工営の建設現場に入ったことはない。しかし、ビエンチャンを訪れたとき、メコン河上流の一支流でダム建設の調査を行なっている若い土木技術者から直接に話をきいたことがある。そのとき「東南アジアの開発に寄与する」と口でいうはやさしいが、いざそれを実行に移すことは、いかにたいへんであるかということ、しみじみと思ひしらされたのであった。

こんど岩波新書の1冊として、本書の広告を見て、さっそくこれを求め、むさぼるようにして一気に読んでしまった。読後の興奮さめないうちに、本書を紹介しておきたいと思う。

本書はもちろん学術研究書ではない。しかし、東南アジアの研究のために教えるところはきわめて大きい。なぜなら、著書は5年にわたって身をもってビルマの経済開発の現場にうちこんだのだから。バルーチ

ン発電工事のため、トンゲーから発電所までの間に送電線を建設しなければならない。その送電線の建設のためにトンゲーからロイコーに至る間の道路を建設する。これが、トンゲー・ロードであり、著者はそのため昭和29年の末から5年間この建設に没頭する。insurgents の出沒するカレン州の山岳地帯200kmにわたっての道路建設の consultant engineer としての体験は実にたいへんなものだ。この経験が淡々として、語られている。文章はよく、しかも多数の地図や写真がいっそう読みやすくさせている。まことに興味ある読みものである。

東南アジアにおける土木技術者の仕事がいかにたいへんであるかは、本書でよくうかがえるであろう。それとともに、それがなぜたいへんなのか、その言外の意味がいろいろと考えさせられる。とくに、developing countries における経済計画のありかた、またそこにおける指導者や住民の behavior にいろいろと問題があろう。これだけ苦労して建設したバルーチャン発電所の第1期工事8.4万kwがビルマ経済発展にはたす役割こそ、とくに知りたいと思う。おそらく、わたくしだけでなく、本書を読みおわったあと誰しもが希望するのではなからうか。とりわけビルマが“The Burmese Way to Socialism”を進んでいる今日、いっそうこの建設工事の現実的成果が知りたいものである。(本岡武)

Enke, Stephen: Economics for Development. Prentice-Hall, Inc., Engelwood Cliffs, N.J. 1963. pp. xxii+611.

東南アジアの経済開発問題を取りあつかうためには、経済開発理論をかためておかねばならない。

経済開発理論の文献としては戦後20年近くの間に、数多くの出版を見るに至り、経済学において、ひとつの分野を確立するに至っている。

しかし、新刊のデューク大学教授エンケによる本書は、とくに注目をひく。第1にそれは近代経済学の成果を、グラフ、モデルおよびタームをとおして、きわめてわかりやすく、経済開発理論にとりいれている。しかも本書が All the Peasant Cultivators of Asia, Africa, and the Americas, Who Remain the Forgotten Men and Women of Economic Development にデディケートされているように、著者の

多年にわたる現地研究と、そのときに体験した低開発国の農民にたいする愛情とでつらぬかれている。まさしく理論と実践とのたくまざる組み合わせが、ここに見られる。しかも第2に、経済開発にかんする主要問題をもれなくカバーしている。すなわち、第1編の低開発の特徴からはじまり、第2編に開発のための innovation の意味、その innovation を実現するために、第3編では資本の蓄積と投下、第4編では労働の投下、さらに第5編は開発と貿易および援助との関係、最後に第6編として展望をとりあつかう。末尾の文献もよくできている。わたくしは、本書は経済開発にかんする入門書あるいは概説書として非常によくできていると思う。とりわけ、農業問題を強くとりあげていることは、低開発国の現状からして当然であろうが、興味深く思われる。そのなかで、低開発国における経済開発の方向として一挙に工業化を促進するか、それとも農業から固めてゆくかとの問題はエンケ教授の深い関心の問題である。これについては付録Aとして、Review of Economics and Statistics の1962年2月で発表した論文に手を加えた「農業生産性向上をとおしての工業化」が再掲載されている。おそらく、経済開発を具体的に考える場合の根本的問題のひとつであろう。その農業生産性向上についても、農業革新は community development なくしてあり得ないとの主張もまことに同感である。

もっとも、本書は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ等の全世界の低開発国を取りあつかっているために、東南アジアの実情にマッチしない議論も多い。また東南アジアといっても国々によって経済開発の現実やこれからのありかたはまちまちである。この多様性を考えながら本書を読むとき、いかに経済開発が現実の問題として困難であるかを思わせる。いずれにせよ、わたくしは本書は経済開発にかんしてぜひとも一読おすすしたい好著であると思う。(本岡武)

Johnson, John J. (ed.): The Role of the Military in Underdeveloped Countries. Princeton University Press, Princeton, New Jersey. 1962. pp. viii+423

比較政治学の分野で、新興諸国と軍部との必然的結びつきが語られるようになってから久しい。しかし、従来はその主題に関するケース・ワークがなされず、も